

火星

平成二十三年四月号



七曜抄
(七)

山尾玉藻

辛夷咲く空をもつとも信じをり

大佛の水を濁さず蝌蚪生まる

鮎子を煮る昼の灯を点しけり

考へのまたはじめから蝮の道

べつべつの鴨見てふたり春炬燵
野遊や天体ドーム遙かにあり
茶畑にゆきわたりたる春の闇
吉祥天まで草笛の子を連れて
閨門のひらきどきなり朝桜
お遍路のどつと入り来し甘茶寺

太白星

柳生千枝子

映像にピント合はする雪催
ゆりかもめ間近に見えし泣きぼくろ
霜の夜の星光寂と地を照らす
毛布かけくれしは亡母か夢うつつ
湯ざめしてをりぬ日記を書き終り
武者凧を空に嵌めある日和かな
南天に凍て傾きてオリオン座

杉浦典子

初松籟鼓の音にかぶさり来
神の火の灰掃き寄する四日かな

冬木の芽 天井川と光りあひ
海見ゆる ストープ列車に 鯛の香
約束に 間あり 日向に 寒雀
寒雀 散りばらばらに 戻りくる
初東風や 松の根方の 松落葉

浜口高子

柚子釜やしづかに 移る夜の雲
本殿の裏に 日あたる 初詣
風花や 靴音の 浮く石の橋
射はじめの音で ありけり 松の晴
鳥の巢を 抱へし 風の大枯木
雪暗や ティッシュが箱を 立ち上がり
麦の芽や 畔踏みは づし 踏みは づし

火星作品 山尾玉藻選

どの部屋も小菊のほふ除夜の鐘 大和郡山城 孝子

若菜摘マフラーすぐに解けたる

水見つつ水に寄る鹿初景色

女礼者くるなり授乳はじめけり

人日の畑平らなる白毫寺

應舉寺なり雪吊の高からず 神戸深澤 鱻

御降りの地雨となりし宇多野かな

門松のぎいと鳴る夜の有馬にぬ

僧形の艶めいて出づ歌留多管

初弘法ひと頭の影も踏み

初旅や水たまりある滑走路 八幡丸山 照子

初風やもとより菰のなき蘇鉄

さたうきび畑の向うを春著の子

戦闘機の音を見上げし初御空
春著の子の蝶とまるやう座しにけり
ほろ酔の父と鴨見に恵方道
餅を切る父の腰浮く冬日向
去年よりも今年赤子に泣く力
天王寺七坂晴るる女正月
甘櫨の薄雪はらふ仏の座
雪暗の三日つづける鳩のこゑ
くれなゐの鰓に庖丁始かな
家ぢゆうの窓にあをぞら冬休
寒すずめ葦の葉擦れに眠りをり
桑の木に脚立寄せある雪間かな
山肌も空空もしろがね初箒
雪折れのアロエを起こす松の内
凧やもの食ぶる貌玻璃越しに
雪女来さうな夜風燠の花
浴しけり大注連縄の雪しづり

宝塚山田美恵子

蘭定かず子

八幡坂口夫佐子

選のあとに

山尾 玉藻

滑走路に水が溜まっている様子から察して、雨上りのローカル空港であろうか。光まばゆい麗かな景が浮かび上がってきて、初旅にある作者のこころ躍りが伝わってくるようである。

若菜摘マフラーすぐに解けたる

城 孝子

餅を切る父の腰浮く冬日向

山田美恵子

七草を摘む手をちよつと留めてマフラーを巻き直し、また摘み始める。なんどとなく繰り返されるその動作は、格別に女性らしさを誇示するものではないが、ほのぼのと暖かい目映さを漂わせている。若菜野もほのかに香り立つようである。

應寺なり雪吊の高からず

深澤 鱧

鏡開きであろうか、かなり固くなつてしまつた餅に違いのない。「腰浮く」より、包丁に体重を乗せて今まさに切ろうとする瞬間の姿を想像するからである。父親の、否、男の威厳を保とうとするかのような力の入れようを、微笑ましい思いで眺める作者である。

凧やもの食ぶる貌玻璃越しに

坂口夫佐子

兵庫県美方にある大乘寺には円山応挙が描いた襖絵があり、俗に応挙寺と呼ばれている。襖絵を何処から眺めても描かれた仔犬たちがこちらを見ているという不思議な画法が駆使されており、仔犬たちの愛らしい表情がとても印象的である。「雪吊の高からず」の情景は、そんな愛らしい仔犬たちにかにも相応しい。

寒風の中、作者は煌煌と灯すレストランの前を歩き過ぎたのであろう。人が食べものを咀嚼する貌や食べものに口を開ける貌には、どこか間の抜けたもの哀しさが漂うものである。思いがけずそのような貌を垣間見た作者は、一層の寒さを覚えたのであろう。

(以下略)

初旅や水たまりある滑走路

丸山 照子

恒星圈

高松由利子

水干の五色がゆらぐ鞠始
まづ起こすことに始まり祝箸
大寒のことに遠くを二上山
粥供す寺も大和の餅間
太箸に口伝の肴ならべたる

大東由美子

田中みのる

お隣と塀を共有冬薔薇
冴ゆる日の行つたり来たりしたあとに
家々の水仙めぐる靴の音
雪間はや土をついばむ雀かな
マークシート塗り潰しをり紙懐炉

奴胤姫路藩主の馬場にかな
鱈場蟹仲居の年季指に出づ
「龍の湯」に身体ほつこり二日かな
一月のおいらんが練る魚の棚
臘梅や喜春城趾が春を待つ

高尾豊子

戸栗末廣

おほかたの女長生き寒董
たこ焼のソースたつぷり三日かな
サスペンスドラマの果てし猫の恋
冬空の近くなりたる二階かな
この土手の冬知らずてふ花の群

山門に今年の星を仰ぎけり
笹鳴のへだたりにあり仁王の眼
散り際も人目に触れず帰り花
冬の畑けもののやうに踏みある
人日のぶつぶつ言うて山鴉

獅子座

山尾玉藻推薦

川端俊雄

別の世の父と座しをり屠蘇の席
落石もある瀧道の寒鴉
梅探しあるポケットにワンカップ
凍雲や山膚日ごとあらはなる

奥田順子

ひとしきり椋鳥騒ぐとんどかな
冬晴や九官鳥に返事して
人の日の夫の行先聞きそびれ
丁寧に護摩木寄せらる冬の鴉

藤田素子

起きぬけの白湯の一杯初御空
初夢のかけらを探す寝床かな
高架下にソースの匂ふ寒の雨
大寒の鴉ひと声づつつ句切り

福本郁子

大寒の駅員の笛ひかりけり
風花や獅子のたてがみ眠たさう
無人駅の監視カメラや冬すみれ
大甕の氷そつくりかかへし子

山口美貴子

来る子あり帰る子のある二日かな
改札口で待つて福笹もらひけり
降る雪に火屑飛びつく吉書揚
寒餅の杵に手拍子生まれけり

井上淳子

臥す母に土ごと掬ふ霜柱
息白く古希の競へる肺活量
子授けの水掛け兎に浮く氷
霜枯のたんぼぼも入れ七日粥

西村節子

レジ袋に葱をつつ立て男かな
初鏡母に衿足ありにけり
ランタンの灯る窓辺も去年今年
町に入り声の張りたる寒念仏